



Title	指示代名詞の指示機能について
Author(s)	今井, 四郎
Citation	北海道大学人文科学論集, 15, 1-16
Issue Date	1978-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34339
Type	departmental bulletin paper
File Information	15_PL1-16.pdf



指示代名詞の指示機能について¹

今 井 四 郎

指示代名詞の機能的特質

我々の有する語彙は名詞が大部分で代名詞はその極く一部分を構成するに過ぎない。本研究の研究対象である指示代名詞の数は更に限られる。心理学を専攻する筆者がこの数少ない指示代名詞に注目してそれを研究対象として選択した理由についてはやがて論ずることにして、その前に、特に相互間の相違に重点を置いて、名詞・人称代名詞・指示代名詞の間の比較検討をすることにしたい。最初に名詞対代名詞の形で計量的差異を論ずる。

計量的差異

名詞対代名詞の間には先に述べたごとく語彙数に大きな差異が存在する。このことは例えば国語辞書に現われている。辞書に出てくる単語の大部分（恐らく 90% 以上）は名詞であり、代名詞は 0.1% に満たないであろう。また名詞と代名詞では、単語を仮名書きしたときの長さが異なる。全体的に名詞に比較して代名詞は短い。

ところで前述の名詞の語彙数が大きいということは必ずしも名詞が言語活動の中で圧倒的に高い頻度で用いられるということにはならない。例えば電話を通じて英語による会話が行われる場合についてのある調査によると代名詞が最も頻繁に使用される (French, et al., 1930)。このことは代名詞に属する単語の種類は少ないので同じ代名詞の単語が非常に高い頻度で出現することを意味している。この事実は代名詞に属する単語は短いという事実とともに、古くから知られている頻繁に使用される単語は短いまたは短縮されるという一般的事実にも一致しているのである。

次に名詞、人称代名詞、指示代名詞間の機能上の質的差異について考察する。(例えば、時枝, 1950; 阪倉, 1975 を参照のこと。)

注1 本研究は文部省科学研究費（今井四郎, 251031）の補助を受けた研究の一部である。また、本研究の論文執筆に当っては、日本学術振興会流動研究員として北海道大学文学部に滞在中の徳島大学助教授松田隆夫氏より有益なご意見をいただいた。なお、実験データの収集および分析に当っては、藤田はるみ氏に負う所が多い。こゝに両氏に感謝の意を表する次第である。

機能的差異

名詞、人称代名詞、指示代名詞²の機能に關係して、それらの対象依存性、対話者依存性、場所依存性について論ずる（表・1）。

対象依存性 対象依存性とは、名詞、代名詞に属する単語を使用するとき、対象によってその単語が選択的に用いられたり用いられ得なかったりする依存性をいう。例えばツクエという名詞は対象が机のときに限って使用することができる。対象が椅子のときはもはやその単語は使用できない。

名詞が人である場合に対応する代名詞すなわち人称代名詞では例えば話し相手³は誰でも第2人称で呼ばれる。たゞ同じ第2人称でも、君、あなた、あなた様等の種類があり、相手により使い分けがなされる。この意味で人称代名詞には対象とする人がいかなる人であるかによって区別して使用されることに由来する弱い対象依存性が存在するといえる。

他方、人以外の名詞に対応する代名詞すなわち指示代名詞コレ・ソレ・アレの場合には、その対象が本であれりんごであれ対象の種類によらずに使用される。換言すれば、指示代名詞は対象依存性を示さないのである。こうして表・1に示すごとく、名詞は強い、人称代名詞は弱い対象依存性を示し、指示代名詞は対象依存性を示さないという特徴が見られる。

人称代名詞の1つの特徴は、名詞および指示代名詞と異なり、その機能が話し手および相手に依存することである。次にこの対話者依存性について述べる。

対話者依存性 今A、B、Cの3人がおり、AがBに向かって話をしているとしよう。このときBは話し相手であり第二人称で呼ばれ、Cは第三人称で呼ばれる。次にAがCを相手として話をすることになれば、同じBが今度は第三人称で、Cが第二人称で呼ばれることになる。このようにして同じ対象B、Cに対する人称代名詞が話し手と話し相手すなわち対話者間の関係で変化する。この場合にそれは対話者依存性を示すという。この例からも分るように、人称代名詞は明瞭な対話者依存性を示す。

これに対して名詞は対話者依存性を示さない。このことは上のA、B、Cの誰が誰に向かって

表1 名詞・代名詞の対象－、対話者－、および場所－依存性

品 詞	依 存 性		
	対象	対話者	場所
名 詞	○	—	—
人称代名詞	(○)	○	—
指示代名詞	—	—	○

注2 本論文では、指示代名詞コレ・ソレ・アレの機能のうち特に現実場面における指示機能を扱うことにする。限定の理由は指示代名詞の本質的・原初的機能は現実場面における指示機能にあると考えるからである。そして他の機能については、その拡張的、比喩的用法であると考え、指示代名詞の基本的機能を検討しようとする現段階では本質的・原初的機能に限定し、不必要に拡大、複雑にすることを避けるのが賢明であると考えからである。

注3 人によれば話し相手を聞き手と表現することがあるが、話し相手が必ずしも聞き手ではないこと、および話し相手でない者が聞き手である場合があることからこの表現は妥当ではなからう。

話をしているときでも机はツクエと呼ばれることから明らかである。

次に指示代名詞の場合について考えてみよう。例えば、Aの近くにBから離れてりんごがあるとすると。Aは恐らくそのりんごを指してコレというであろう。ところがBはそのりんごをコレではなくソレまたはアレといって指示することになる。このことは一見指示代名詞は対話者依存性を示すごとく見える。しかし、我々はこのような場合はむしろ次に述べる場所依存性に還元されるべきものと考ええる。

こうして名詞および指示代名詞は対話者依存性を示さないが人称代名詞は対話者依存性を示す。従ってこの対話者依存性は人称代名詞と名詞および指示代名詞とを区別する1つの特徴と考えられよう。最後に場所依存性について述べる。

場所依存性 ある種の単語は、その指示対象と対話者との距離関係によって使用可否が決定される。このようなときその単語は場所依存性を示すという。

名詞および人称代名詞に属する単語は場所依存性を示さない。例えば名詞に属する1つの単語ツクエは対話者との空間的關係で机がどこにあらうともツクエと表現され、また人称代名詞の場合指示対象とした君が場所を変えたためにキミと呼ばれなくなるといったことは起こらない。このような理由から名詞および人称代名詞は場所依存性を示さないといえる。

ところが、指示代名詞の場合には事情が異なる。対象が対話者に対していかなる位置を占めるかによって、コレ、ソレ、あるいはアレといって表現される。つまり、対象の表現に際して指示代名詞は場所依存性を示すのである。従って、この場所依存性によって指示代名詞と名詞および人称代名詞との間に区別を立てることができる。なお、指示代名詞がいかなる場所依存性を示すかについては節を改めて論ずることにする。

以上我々は名詞、人称代名詞、指示代名詞の相違を論じてきた。それを要約すると表1のごとくなる。名詞は対象依存性を、人称代名詞は対話者依存性を示し、場所依存性を示すのは指示代名詞だけであるということから、3者は区別されることが明らかにされた。

さて本論文の目的の1つは指示代名詞特有の機能的特徴である場所依存性をとりあげ、いかなる依存性を示すか明らかにすることである。それ故以下にや、詳しくこの問題を論ずることにする。

指示代名詞の場所依存性

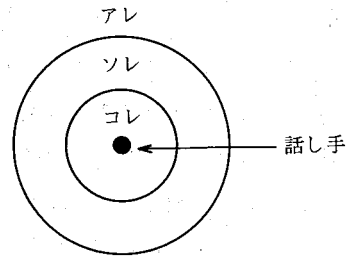
指示代名詞の機能的特徴の1つは、それが対象依存性を示さないことである。名詞はその強い対象依存性を有するために表現の中核となる表現対象を特定することができる。ところが指示代名詞はこの性質を欠く。それ故この方法によって表現対象を特定することができない。そこで場面という概念が導入される(例えば、岡村、1972; 佐久間、1936)。話し手は対話の場面あるいは表現の場面(例えば岡村、1972 参照)を考慮しながら指示代名詞の対話者および指示対

象間の空間的位置関係に基づく場所依存性を利用して表現対象を指示・特定するのである。従って対象の特定表現において指示代名詞を用いる場合にはその認知過程は名詞を用いる場合とは異なるに違いない。

本論文で我々はこのような問題を検討する基礎的研究の第一歩として指示代名詞の場所依存性を実験的に求め、その結果を具体的にいわば地図で示し、それに基づいて2, 3の言語学的、心理学的問題を考察しようとするものである。

指示代名詞コレ、ソレ、アレはときにそれぞれ近称、中称、遠称と呼ばれる。近称のコレは話し手に近いもの、中称のソレは中距離にあるもの、そして遠称のアレは話し手から遠いものを指すという区別が与えられている（例えば佐久間, 1936）。このことを最も単純に例示すれば図・1のようになる。

このような図示にはいくつかの問題点が付随する。第1に同心円は実際に形が円形の領域を考えているのか、それとも円というのは重要な意味をもたないで、話し手を含んで空間を、話し手の近傍領域、その外側の第2近傍領域と更にその外側の3領域に分割することに意義があるのか不明である。第2に領域のサイズが不明である。第3に領域の分離は形、サイズを含めて、対話者の相対的位置関係によらない表現方法をとっているように思われるが、そうとてよいのかどうか、というような問題である。



図・1 話し手と指示代名詞コレ、ソレ、アレの指示領域図

このような問題の他に更にそれが実験的に検証されて来なかったという問題を含んでいるが、次に指示領域に関する代表的モデルについて図示し、簡単な説明を加えることにする。

指示領域モデル

指示代名詞の指示領域については多くの興味ある研究がなされている。しかしこゝではそれらの研究について詳細に比較検討することをせず、2, 3の代表的モデルについてのみ触れることにする。我々は指示代名詞の指示領域を与えるモデルを2種類に大別する。1つはコレ・ソレ・アレの指示領域が話し相手の位置と無関係に決定されるとする絶対的場所依存性モデルであり、他は指示領域の形、大きさは対話者相互間の相対的位置関係に依存するとする相対的場所依存性モデルである。

絶対的場所依存性モデル

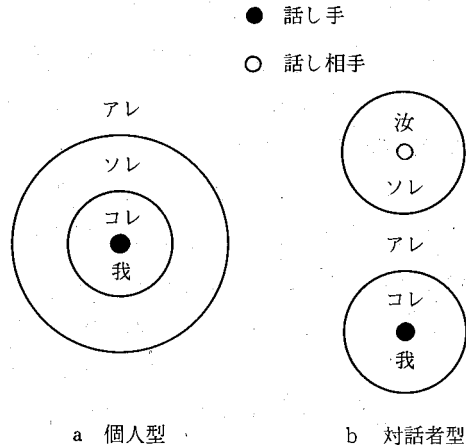
このモデルによって考えられる典型的指示領域は個人型（図・2 a）と対話者型（図・2 b）

の2種類に分類される。

個人型の指示領域では、話し手の周囲に内側からコレ、ソレそしてその外側にアレの指示領域が存在するとし、その形、大きさは対話者間の空間的位置関係には無関係に定まると考えられる(服部, 1961)。

対話者型では、話し手の周囲に話し相手の存在とは無関係にコレの指示領域が定まる。話し相手の周囲にもこれと同じ指示領域をとり、これがソレの領域とされ、残余はアレの領域とされる(服部, 1961)。

これらのモデルでは、与えられるコレ、ソレの領域は、形・大きさともに対話者間の位置関係によらずに決定され、残余の領域がアレの指示領域となる。



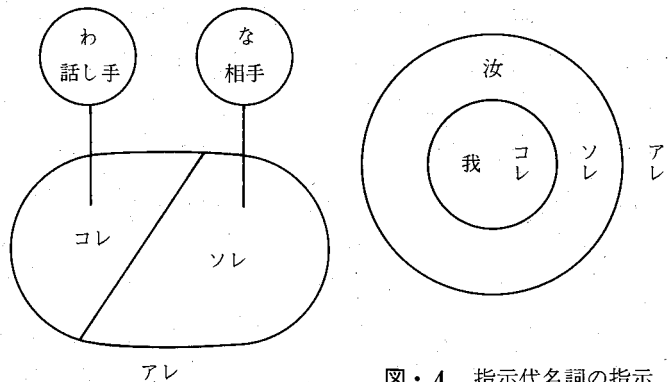
図・2 指示代名詞の指示領域を与える絶対的場所依存性モデルの説明図

相対的場所依存性モデル

我々は指示領域の対称性に注目してモデルを対称型と非対称型とに分けて以下に説明する。

対称型 佐久間は現実の話の場の中に話し手と相手を中心とする「なわばり」すなわち話し手のなわばりおよび相手のなわばりを考える(図・3)。そして前者の領域にあるものはコレで、後者の領域にあるものはソレで指示され、残余の領域はアレで指示されると考えた(佐久間, 1936)。こゝにコレとソレの指示領域は互いに対称で両者は対等の関係にあると見られる。この他対称型に入るモデルは例えば池上(1967)のモデルがある。

非対称型 非対称型はコレ、ソレの領域が互いに対称性を示さない場合である。例えばコレの指示領域の外側に話し相手を含んでとり巻くソレの領域を設ける服部のモデル(服部, 1961)はこれに入る(図・4)。



図・4 指示代名詞の指示領域を与える非対称型・相対的場所依存性モデル説明図

以上述べて来たモデルの他に、いくつかのモデルが提出され

ているが、それらを解説するのは本論文の意図ではないので割愛し、最後に相対的场所依存性（非対称型）モデルに分類される我々のモデルについて述べることにする。

指示領域の認知論的モデル

先に我々は指示代名詞は対象依存性および対話者依存性を示さず場所依存性を示すことを述べた。そこで我々は、2、3の仮説を立て考えられる指示領域の形、大きさについて論ずる。

指示領域単純形の仮説 対象の指示・特定に場所依存性が用いられ、それとの関連で、コレ・ソレ・アレの指示領域が分離するものとする。すると指示特定の難易は分離した指示領域の形の複雑さに直接関係する。そこで我々は指示領域単純形の仮説をおく。この仮説によれば、それぞれの指示領域の形は単純で1つの指示領域の中に島のように他の領域が入り込むことと、また領域間の境界が複雑に入り組むこともないと考えられる。

総関与量均分化の仮説 例えば図書館での図書の分類整理のために、人々がほとんど関心をもたない領域に対しては大きな分類項目を与え、多数のあまり利用されない図書をその項目中に分類する。逆に多くの人々が頻繁に利用する領域の図書の整理には細かい分類項目を設けて、その項目中の所蔵図書数を少なくする。するとそのような図書館は借用図書の特定が能率良く行われ、利用し易い図書館となるであろう。指示領域の決定も同様で、関与度を指示領域内の単位面積あたりの指示代名詞の使用頻度で表わすことにすると、その関与度の高い領域は狭く、関与度の低い領域は広くとることが言語行動学的に能率が良いであろう。このような考えから、我々は各領域の総関与量（コレ、ソレ、アレのそれぞれの総使用頻度で測定される量）は均分化する傾向にあるとの仮説をおく。関与度はコレの指示領域で最高で、ソレの領域がこれに次ぎ、アレの領域が最低であると仮定すると、この仮定によりコレ、ソレ、アレの順序で指示領域の面積が増加することが導かれる。

指示領域間優位性仮説 指示領域の決定に関して指示領域間には優位性の差が存在し、関与度の高い領域は低い領域に対して優位性を示すとの仮説をおく。前述の仮定により話し手のコレの領域は関与度が最高である。次いで高いのはソレの領域である。この領域はコレの領域の外側のある領域と話し相手のコレの領域に相当する領域とを含む領域になるであろう。そして残余領域であるアレの領域は最も低い。領域間優位性が典型的に現われるのは、コレの領域と、ソレの領域となるべき話し相手のコレの領域に相当する領域が重なる場合である。この場合コレの領域の優位性仮説から重なった領域はコレの領域となると考えられる。

相対的空間位置依存仮説 対話者依存性は典型的には指示領域の形、大きさが対話者の間の距離および対話者がどちらを向いて位置するか、すなわち両者の相対的空間位置に依存する形で現われると仮定する。そこで我々是对話者にとって関与度の高いコレおよびソレの指示領域は対話者間の相対的距離の増加とともに単調にそのサイズを増し、その形は対話者の向きおよ

び相互間距離に依存するとの仮説をおく。

このような作業仮説に基づく認知論的モデルは明らかに非対称型、相対的场所依存性モデルに入る。

本研究の目的 現在までに提出された数多くの説およびこゝに述べた認知論的モデルを検証するために指示代名詞の指示領域を実験的に測定する。そして、今まで個人的経験に基づいて立てられ、主張され、とかく実証的裏づけに欠けるうらみのある諸説を経験的データに基づいて比較検討することにある。なおこの問題は別の見地から見ると、我々の作業仮説から想像されるように、対話者の相対的位置に依存して変動する人々のダイナミックな空間認知の問題でもある。それ故本論文では、我々は経験的事実に基づいて空間認知の問題にも考察を加える。

方 法

被験者

北海道大学学生 80 名が参加し、実験は個人実験の形で実施された。

場面の設定

我々是对話の場面として通常の現実場面とは異なる仮想的、実験的場面を設定した。実験机の上に 40cm × 55cm の模造紙を置き、その上に 2 個の高さ約 10cm の人形 Q および A と玩具のカンが置かれた。このような場面の中で人形がカンを指示対象として次のような対話を行うことが想定された。

人形 Q が人形 A に向かって、

「××は何ですか。」

と問う。これに対して被験者は人形 A の役割を演じ、○○のところに指示代名詞コレ、ソレ、またはアレを使って、

「○○はカンです。」

と答える。

実験は、いわば現実場面をこのミニアチュア場面に投影したものである。そしてその中で指示代名詞コレ・ソレ・アレがいかに使い分けられるかを人形の位置、カンの位置を変えながら測定した。

こゝにミニアチュア場面を設定し、人形を使用した理由、利点について 1, 2 あげる。1) ミニアチュア場面はスケールが小さいので現実場面による場合より実験が容易に進められ、コレ・ソレ・アレの指示領域の地図も容易に描きうる。2) 例えばコレの領域の大きさは対話者の身長により変化し得る。もしそうだとすると被験者の身長によって測定される領域の大きさが変動することになる。ところが対話者と想定される人形は常に一定しているのでこの身長による影響は人形を使用する限り入ってくる恐れはない。このように指示代名詞の使用が

対話者の個人差の影響を受けるような場合にその効果を避け、または小さくすることができる。

他方不利な点も存在する。ミニアチュア場面を使用して現実場面をこれに投影し、人形の役割を演ずるとはいつても、必ずしも現実感がともなわないきらいがあろう。従って実験ではこの点を改善するために対策が講じられなければならないであろう。

実験条件

実験条件として（人形の並べ方2条件）×（相互間距離3条件）の合計6条件が設けられた。人形の並べ方については人形を同方向に向けて横に並べた並立条件と互に向い合う対面条件をおいた。

相互間距離の3条件としては、人形の並べ方2条件の各々について会話を行うのにもっとも適切な距離（藤沢、1974の研究参照）およびその2倍、4倍の3段階の距離を選択した（表・2）。

実験手続

各被験者はミニアチュア場面に入る前に実感を把握するために、実験者と建物内でカンを指示対象として現実場面で指示代名詞を使い分ける経験を与えられた。その後実験室に入り実験が行われた。

実験室では実験計画に従って実験者はまず模造紙を机の上に置き、そのときの実験条件に応じて人形をおく。実験者は被験者を指定の人形の後方に着席させる。実験者は玩具のカンを模造紙上適当な位置におく。ただし人形の真横より後方には置かない。各条件ごとに次々と位置を変え、その度ごとに置いた場所で使用した指示代名詞を模造紙上に記入して行く。このようにして指示領域の全体的イメージが形成されるまで続け、定まったら紙の上に鎖でコレ・ソレ・アレの領域の境界線を型どり、終了後鉛筆で描き残す。このようにして各条件ごとに模造紙を取り換えて指示領域の地図を作り、総ての実験条件を終了する。

人形間距離は並立、対面条件ごとに常に増加する順序で実験が進められた。それ以外の条件については被験者間で適当にカウンター・バランスされた。

表2 人形の並べ方条件と人形間距離

並べ方条件	人形間距離(cm)		
	d ^a	2d	4d
並立条件	4 (65) ^b	8 (130)	16 (260)
対面条件	7 (115)	14 (230)	28 (460)

a dは会話を行うために最も適切な距離で藤沢（1974）により測定されている。

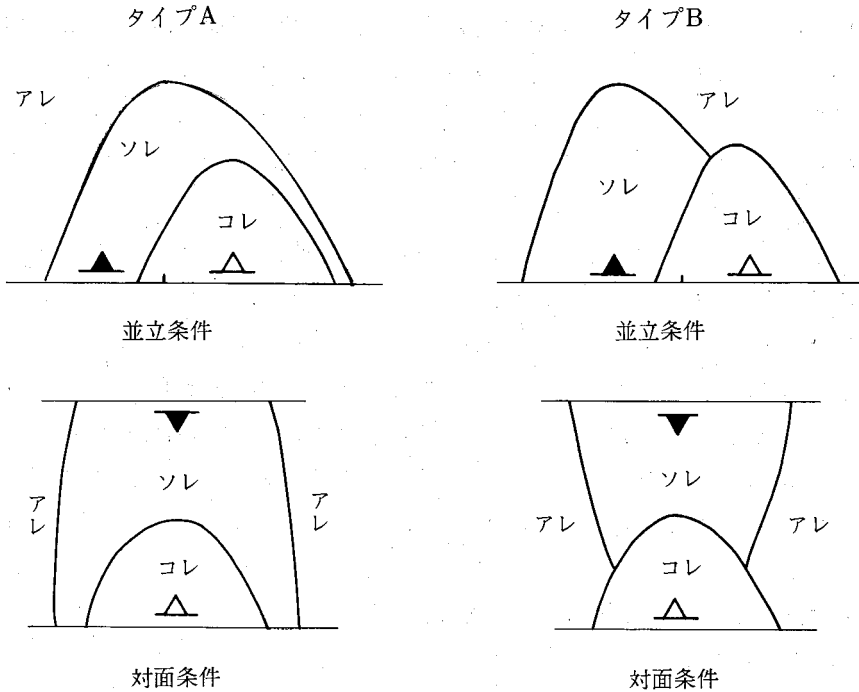
b. 括弧内の数値は人間間の距離に変換した場合の換算距離を示す。

結果と考察

各条件ごとに80名の被験者の示した指示領域の形状、大きさを概観すると2つのことに気づく。第1に並立条件、対面条件とも対話者間距離の増加とともにコレおよびソレの領域の面積が増加すること。第2に並立条件と対面条件とでは、コレおよびソレの指示領域の形状、大き

さとも異なることである。しかしながら、全体を通じて指示領域の形状に関して2タイプが存在することが明らかに分る。これらをタイプA, Bとする。

タイプA：話し手をほゞ中心にしたコレの領域の周囲をソレの領域が取り囲む。話し相手がアレの領域に入ることはない（図・5）。



図・5 並立条件, 対面条件下に見られるコレ, ソレ, アレの指示領域の形状のタイプ

タイプB：話し手をほゞ中心にしたコレの領域がある。ソレの領域はタイプAと異なり、コレの領域全体を覆うことなく、コレ・ソレ・アレの3領域の接点が存在する。話し相手がアレの領域に入ることはない。

表3 指示領域の形状のタイプA, Bの出現頻度率(%)

指示領域の形状のタイプ

6.条件の各々について80名の被験者から得た指示領域の形状を上のタイプA, Bに分類した結果を表・3に示す。

並立, 対面条件とも約70%の被験者はAタイプの指示領域図を描き, Bタイプは約20%で両

タイプ	並 立 条 件				対 面 条 件			
	d	2d	4d	M ^a	d	2d	4d	M
A	74	74	69	72	75	71	72	73
B	26	26	29	27	21	25	23	23
その他	0	0	2	1	4	4	5	4

a. Mは人形間距離の3条件(d, 2d, 4d)についての平均出現頻度率を示す。

者合計は90%以上に達し、その他は5%以下に過ぎなかった。このタイプA、Bの分離は被験者ごとに高い一貫性を示した。すなわち、同一の被験者の指示領域図がある条件ではタイプAに、他の条件ではタイプBに分類されることはほとんど見られなかった。並立条件下で対話者間距離を変化した場合に指示領域図のタイプがすべてAに分類された被験者数は全体の66%、Bに分類された者24%で残余は10%に過ぎなかった。同様に対面条件の場合には同じ順序で68%、16%、16%であった。さらに、6条件を通じての一貫性も高く、タイプAにすべて分類された者63%、タイプBに15%で残余は22%に過ぎなかった。

以上の結果から我々はコレ・ソレ・アレの指示領域図には上の2つのタイプが存在すると結論する。

この結果は、指示代名詞コレ・ソレ・アレの領域図に関して、個人間に質的（正確には位相幾何学的）な差異が存在することを示している。このことは、このような差異のある条件下でいかにコミュニケーションが成立するか、コミュニケーションによる個人差の盛衰等興味ある問題を呼ぶ。さて並立および対面条件とも指示領域図は位相幾何学的にA、Bのタイプに分離されるが、しかし同じタイプの場合でも並立条件と対面条件とでは指示領域の形状が異なる。

これらの事実、指示領域を与える従来の説がとかく対話者の向きを重視せず、また服部（1968）の方言差の指摘を除いては個人差を考えなかったことに対して反省をうながすものである。またタイプA、Bともコレとソレの指示領域の形状は相互に対称的でない。従って対称型モデルは実験的に支持されなかったと結論される。

なお図・5、後の図・6に示されるごとくタイプAでもタイプBでもコレ・ソレ・アレの指示領域の分節は単純で入り組んだ境界線もなく、他領域に分れて島を形成することも見られなかった。このことから我々の立てた指示領域単純形の仮説は支持されたと考えられる。

対話者間距離の効果

対話者間距離の効果は指示領域の大きさと形状に現われた。最初に大きさに対する効果を並立条件および対面条件に分けて述べる。

指示領域のサイズに対する効果

並立条件下における効果 タイプA、タイプBの場合とも対話者間距離の増加とともにコレおよびソレの指示領域の面積は増加した。結果は図・6および表・4および表・5に示される。図・6から明らかに、タイプA、Bの場合ともコレおよびソレの指示領域は対話者間距離が大きくなるにつれてその面積を増すことが分る。この模様を視覚的でなく数字で示したのが表・4および表・5である。

表・4はコレの領域について対話者間距離の増加につれてその面積が増加すること、たゞしその増加率は対話者間距離に比例するまでに至らないことを示す。さらに領域の横方向の最大

表4 指示代名詞コレの指示領域のサイズ

サイズ	タイプ	対話者間距離					
		並立条件			対面条件		
		d	2d	4d	d	2d	4d
面積 cm^2	A	63	69	99	42	86	155
	B	58	74	128	46	107	240
前方距離 cm	A	6.4	6.5	7.9	4.7	6.5	10.1
	B	7.6	7.1	8.6	3.7	6.8	11.5
側方距離 cm	A	10.7	12.1	15.1	13.5	16.6	20.7
	B	11.0	12.5	17.1	15.1	19.1	26.7

表5 指示代名詞ソレの指示領域のサイズ

サイズ	タイプ	対話者間距離					
		並立条件			対面条件		
		d	2d	4d	d	2d	4d
面積 $\text{(cm}^2\text{)}$	A	276	285	409	123	285	740
	B	94	118	161	51	131	356

幅で定義される側方距離および領域の前後方向の最大距離で定義される前方距離が大きくなることを示している。表・5はソレの領域について同様に面積が増加することを示している。

以上の結果に基づいて並立条件下でコレおよびソレの指示領域は対話者間距離の増加とともにそのサイズが大きくなると結論される。

対面条件下における効果 並立条件下における効果と同様、対話者間距離が大きくなるとともにコレおよびソレの指示領域のサイズは増加した。結果は図・7に示される。図を一見してコレおよびソレの領域のサイズが対話者間距離の増加とともに大きくなることが明らかである。表・4および表・5は、それぞれコレおよびソレの領域の大きさを数量的に示したものである。表からコレの領域の面積、前方距離および側方距離とも対話者間距離とともに増加することが明らかである。ソレの領域の大きさについてもコレの領域と同様に対話者間距離の増大とともにサイズの増加が見られた。

以上の結果に基づいて対面条件下でもコレおよびソレの領域のサイズは対話者間距離とともに大きくなると結論される。

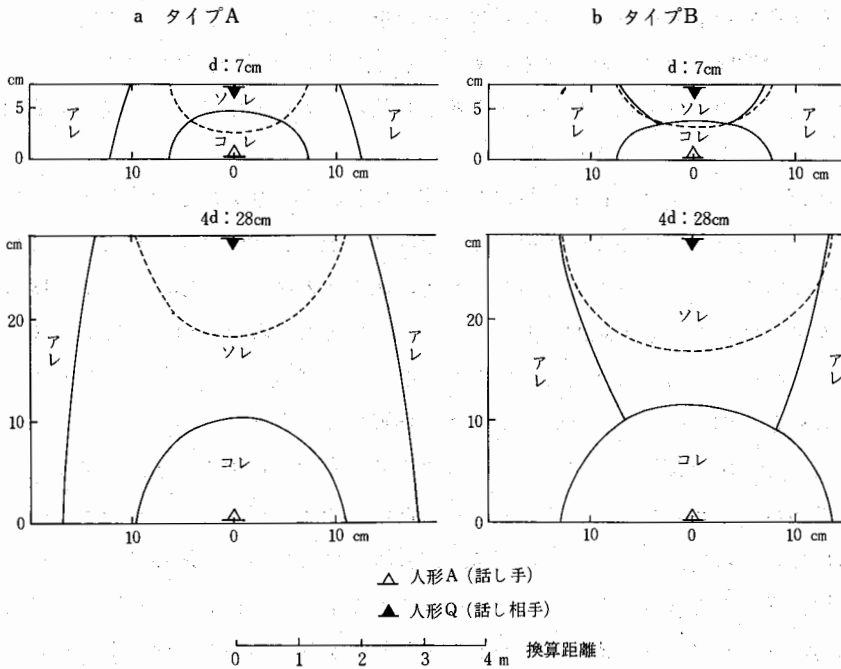
こうして、並立および対面条件とも対話者間距離の増加とともにコレおよびソレの領域のサイズが大きくなることが明らかとなった。ついでながら、これらの指示領域の面積は対話者間距離の2乗に比例する形で増加するのではなく、増加はむしろ線型に近い。

表・4と表・5を比較することによりすべての条件でコレの領域よりソレの領域の面積の方が大きいことが分る。勿論アレの領域は対話者の前方、側方へと拡がり面積は最大である。これらの事実から、1. 総関与量均分化の仮説は実験的に支持され、2. 相対的空間位置依存仮説が支持されたと理解される。従ってそれと対立する絶対的場所依存性モデルは実験的に支持されなかったと結論されよう。

指示領域の形状に対する効果

形状に対する効果はコレについてタイプAとBをこみにして見ることにする。

先ず前方距離と側方距離の比較を行う。興味深いことは対話者間距離の増加とともに側方距



図・7. 対面条件, 対話者間距離 $d = 7\text{ cm}$, $4d = 28\text{ cm}$ 条件における指示領域図

は図・6, 7のタイプBの場合である。コレの領域の境界線は滑らかな曲線で描かれ, そのためソレの領域は境界線を遮られる。同様にコレの領域決定はアレの領域の決定より優位性をもつことが見られる。しかし, ソレとアレの領域間では形状の上からは優位性を論ずることができない。

こうしてソレとアレの間には優位性の差を決めることができないがコレとソレおよびコレとアレの領域間では優位性の差が存在することが明らかにされた。その結果指示領域間優位性仮説は部分的に支持された。

以上の結果を総合して, 我々は第1の結論として絶対的場所依存性モデルおよび対称型モデルは我々の実験結果を説明することができない。従って実験結果を説明する可能性を有するモデルは非対称型でかつ相対的場所依存性を満足するものでなければならないことが結論される。第2の結論として我々の提出した4作業仮説にもとづく, 非対称型, 相対的場所依存性モデルに分類される認知論的モデルは実験的に支持されたと結論する。

考 察

指示機能の合理性

名詞はその単語を異にすることにより特定すべき対象の区別を行う。すなわち, 名詞の表現

機能の基本はその対象依存性によって対象の特定を行うことにある。これに対して、指示代名詞はそのような機能を有しない。対象の指示、特定はその場所依存性による。

本研究の結果、指示代名詞の機能は対話者と対象の3者間の相対的な空間的位置関係に依存して発揮されることが明らかとなった。

指示代名詞の指示領域は、指示・特定が明確になされるべきものと考え、その形状は単純であることが期待される。この指示領域の単純形仮説も実験的に支持された。また、対象の指示・特定が能率よく実行される方向で対話者の関与度の高い指示領域は、関与度の低い指示領域より面積が狭いことも実験的に発見された。すなわち、我々のおいた仮説、総関与量均分化の傾向が実証的に明らかにされたのである。これらの事実はすべて指示代名詞の指示・特定の能率を高める方向に働いている合理的結果と理解することができる。

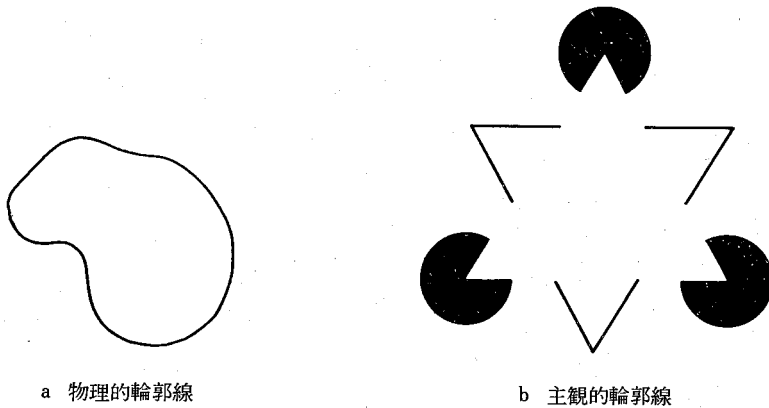
これに反して、指示領域図にタイプAの他にタイプBが存在することは、前述の方向に逆行するものであると考えられる。タイプBの指示領域図ではコレの領域の周囲がすべてソレの領域で覆われていないで、コレとアレの領域が直接境を接している。従ってコレ・ソレ・アレを近称・中称・遠称とする考え方が妥当ではないことを示す。そればかりか、タイプAとBの存在は本来指示代名詞による対象の指示機能を不明確にする。このことは、それぞれタイプAおよびBの指示領域図を有する対話者が指示代名詞を用いて対象を指示する対話を行う場合を想定すれば容易に想像できることである。

このことに関係して2つの問題が提出される。第1に、なぜこのような2つのタイプが発生したか。実験中の被験者の報告によれば被験者の生育地あるいは方言に説明を求めることは困難なようである。第2にこのように異なるタイプの指示領域図を有する対話者間および同タイプの指示領域図を有する対話者間での指示代名詞を用いた対話は相互にいかなる点で異なり、いかなる点で類似しているか興味ある問題であろう。しかしこゝではこれ以上この問題に立ち入って論ずることはできない。

こうして、指示領域図に2種類のタイプが見られる点に問題が残る。しかしそれを除くと指示代名詞の領域の分節には指示代名詞の指示・特定機能を能率的に実行するための合理性が見られるのである。一方、上述の指示代名詞使用にともなう指示領域の分節は対話者の相対的位置関係に依存する形で認知空間あるいは領域の分節が起こることを示唆している。そこでこの問題について物理的または主観的輪郭線の存在する場合、輪郭線が存在しない場合に分けて考察を試みる。

輪郭線と領域の分節

物理的領域は閉じた輪郭線によってその内部領域と外部領域とに2分される(図・8a)。そのとき、我々の認知する領域もまたその輪郭線によって2分される。このような場合の特徴は認知



図・8 物理的輪郭線および主観的輪郭線による領域の分節

的領域の分節が物理的輪郭線によって決定されるということである。しかし領域の分節には必ずしも物理的輪郭線の存在を必要としない。1例は主観的輪郭線による認知領域の分節である。図・8のb図には明らかに白い正三角形の領域が見られる。つまり正三角形の領域と他の領域との分節が見られる。ところで、この白い正三角形は閉じた物理的輪郭線を欠いている。にもかかわらず白い正三角形と周囲の領域との境界は明瞭に知覚される。これが主観的輪郭線と呼ばれる由縁である。このときいかなる主観的輪郭線を生じさせるかは、黒い図形部分の色および形態に依存する。物理的には存在しない主観的輪郭線の形状は周囲の物理的条件に強く規定されるのである。

ところで、周囲に分節領域の形状を強く規定する刺激布置がない場合にも、なお明瞭な認知領域の分節が見られることがある。その1典型例が指示代名詞の指示領域の分節の場合である。

指示領域の分節

指示領域の分節の大きな特徴は、輪郭線がないこと、また分節領域の形状、サイズは対話者間の位置関係によって決定され、他にそれを規定する刺激要因が考えられないことである。しかも日常生活における言語行動に際しては対話者間の相対的位置は絶えず変動する。指示代名詞の使用が可能であるためにはこの変動に応じた認知領域の分節が要求される。すなわち、指示領域の場所依存性はこの認知領域のダイナミックに変動する分節にその根拠をもつに違いないと思われるのである。

結 論

以上指示代名詞を使用する言語活動は、指示代名詞による指示・特定機能が能率よく実行されるべきこと、また認知空間の分節と密接に連携することが論ぜられた。我々は実験結果と考察により次のように結論する。指示代名詞の使用は指示・特定機能の能率性原理と対話者

間の相対的位置関係の変動に応じてダイナミックに変動する認知空間の分節にその根拠がおかれる。そしてこのことにより指示代名詞による対象の指示・特定が、名詞のように対象依存性によって行われるのではなく、場所依存性により能率よく実行可能となるのである。

参考文献

- 藤沢 茂 1974 挨拶空間と会話空間。北海道大学文学部哲学科・実験Ⅱレポート。
French, N. R., C. W. Carter, & W. Koenig 1930 The words and sounds of telephone conversations. Bell Syst. Tech. J., 9, 290-324.
服部四郎 1961 「コレ」「ソレ」「アレ」と this, that. 英語青年, 8月号, 412-413。
1968 英語基礎語彙の研究コレ, ソレ, アレと this, that. ELEC 言語叢書, 三省堂。
池上秋彦 1967 代名詞とは何か。時枝誠記監修, 講座日本語の文法3 品詞各論, 明治書院所収。
宮田幸一 1961 日本語と英語の指示詞。英語青年, 11月号, 812-813。
岡村和江 1972 代名詞とは何か。鈴木一彦・林巨樹編集, 品詞別日本文法講座2 名詞・代名詞, 明治書院所収。
阪倉篤義 1975 改稿日本文法の話。教育出版。
阪田雪子 1971 指示語「コ・ソ・ア」の機能について。東京外国語大学論集21。
佐久間鼎 1936 現代日本語の表現と語法。厚生閣。
時枝誠記 1950 日本文法 口語篇。岩波書店。

The Referential Functions of Demonstrative Pronouns

Shiro Imai

Department of Psychology, Hokkaido University

Abstract

Some theories have been presented on the reference domains of demonstrative pronouns. These theories, however, seem to be based on the private experiences, and have never been tested experimentally. In the present research we built up a cognitive model of the reference domain of demonstrative pronouns which was based upon a few working hypotheses. Then, we carried out an experiment to test the previous theories as well as our model. Experimental results supported our cognitive model, but were against any theories or models which would predict either a symmetric reference domain or a fixed domain independent of the relative location or orientation of two persons who carry on a dialogue. With these experimental results we discussed relationship between reference domain and dynamic space cognition, and we concluded that the functional characteristic of the demonstrative pronoun rests on our dynamic space cognition as well as the principle of efficiency in the referential function.